

3 風船バレーボール

I 競技の特性

風船のゆっくりと動く特性を生かしたバレーボールである。ネット型のスポーツであるバレーボールは、集団的スポーツとしての団結力や協調性が養えるとともに、対戦チームとの接触プレイがなく、安全面でも配慮できる。

特別支援学校の体育の授業などではよく取り入れられているスポーツであるが、ルールは児童生徒の実態によって様々である。

ここでは、特に障害の重い児童生徒を対象としたルール等について紹介する。

II 施設・用具

1.施設

風の影響を受けやすい風船を使用するため屋内が望ましい。

2.コート

バドミントンのコートを使用し、人数や実態に合わせ、エンドラインを調整する。

3.用具

(1) ネット3枚…卓球の防球フェンス(高さ80cm程度)を使用する。

(2) 風船(大)1個…直径が50cm程度膨らませることができるものを使用する。

(3) 得点板

III 競技の方法

1.人数(チームの編成等)

2チームに分かれて対戦する。1チームの人数は、4～8人程度が望ましい。

2.競技の進め方

試合開始前に、各チームごとにサービスの順番を決めておく。ポジションについては特に定められておらず、自由にチーム内で変更することができる。ローテーションもない。各チームの代表がじゃんけんを行い、サービスかエンドを選択する。競技はサービスによって始まる。自陣のボールが落ちないように、ネットを挟んで打ち合う。

3.サービス

(1) サービスゾーンは設けず、コート内であればどこから行ってもよい。

(2) バレーボールと同じようにサーバーが自らボールを頭上にトスして相手コートめがけて打つ。

- (3) ボールがネットに触れてから相手コートへ入った場合にはインプレイとなり、試合は続行される。
- (4) サービスの失敗は、故意でない限り何度行ってもよい。
- (5) サービスは、得点にかかわらず各チーム交互に行う。

4. レシーブ

- (1) レシーブの方法には特に制限はない。
- (2) ダブルコンタクトの規則はなく、同じプレイヤーが続けて何度ボール触れてもよい。

5. その他のルール

- (1) オーバータイムスの規則はなく、チーム内で何度ボールに触れてもよい。
- (2) 介助者のプレイに関するルール
 - ① サービスで、自分でトスすることができないプレイヤーには、介助者がトスするか、プレイヤーが打ちやすい位置でボールを静止させる。
 - ② レシーブは介助者も行うことができる。ただし必ず片手で車椅子に触れていなければならない、車椅子を離してプレイした場合には、相手に得点が与えられる。
 - ③ 介助者はいかなる場合にも、相手コートへ打ち返す攻撃はできない。したがって、相手が打ったボールが介助者の身体に当たり、再び相手コートへ返ってしまった場合も攻撃と見なされ、相手に得点が与えられる(ブロックも禁止である)。
 - ④ 介助者同士でのパス交換は可能である。

6. 得点（相手に与える得点）

- (1) ボールが自分のコートに落ちてしまった場合。
- (2) 打ったボールが、相手コート外に落ちてしまった場合。
- (3) 介助者が相手コートへ打ち返してしまった場合(故意でなくても適用される)。

7. 勝敗の決定

競技は、3ゲームマッチとし、2ゲーム先取したチームが勝ちとなる。1セットの終了は以下の3種類がある。

- (1) 11点ゲーム…11点先取したチームが勝ちとなる。「デュース」になった場合には2点差がついた時点で終了となる。ただし最大15点までとする。
- (2) タイムゲーム…10分の時間内で多く得点を獲得したチームが勝ちとなる。
- (3) 併用型ゲーム…(1)と(2)を合わせた形で行う。11点先取を基本とするが、10分以内に11点に達しない場合には、その時点で多く得点したチームの勝ちとなる。